

人間形成における「超越性」の問題についての臨床教育学的研究
The Problem of “Transcendancy” on Clinical Pedagogy

研究代表者 坂井 祐円 (D1) 教員 西平 直
研究分担者 小木曾 由佳 (M2) 井藤 元 (D2) 柄澤 郁子 (D1)

〔研究目的〕

本研究は、「心が活きる教育」とは何かを思想的アプローチの下で分析的に検討することを目的とし、とりわけ人間形成における「超越性」の問題を取り上げ、「心が活きる教育」の前提条件となるべき理論的地盤の構築を目指す。「超越性」の問題は、「かけがえのない他者（代替不可能性）」への配慮、「生きる意味」の獲得といった、人が生きるうえでの不可欠の要素と密接に関連している。「超越性」の次元は、有用性に基づく世界との関わりを破壊することによって、世界とのつながりを取り戻す体験へと我々を導くものである。現代社会が喪失した「超越性」の軸を教育学の領域において扱うためには、何らかのプロット（媒体構想）を用意する必要がある。そこで、本研究では、まず研究メンバーの個々の思想研究の体裁をとり、その上で、超越を媒体すると考えられるいくつかの基本理念—「自己変容」・「ケア」・「関係性」について検討していく。思想研究の対象は、仏教思想、ユング、ブーバー、シュタイナー、メルロ＝ポンティなどである。これらの諸思想の有機的・連関的・構造的な解明を通して、超越のもつ臨床教育学的な意義を浮き彫りにしていくことが本研究の最終目的となる。

〔研究経過〕

研究代表者である坂井は、「自己変容」・「ケア」・「関係性」の総合的な検討を課題として、東洋思想—とりわけ仏教思想の観点から考察を行った。その成果は3本の論文（『臨床教育人間学』、『南山大学宗教文化研究所報』、『人間性心理学研究』に発表）のうち結実した。そこでは、仏教思想と現代ケア論との接点を明らかにすること、現代ケア論の最も純化した形態であるスピリチュアルケアについて、これを東洋のケアの展開の総括と捉えた上で、その特徴を「関係性」にはたらく「超越」の問題として再構築することを試みた。副代表者である小木曾は、ユング、ブーバーの理論を参照しつつ、人間形成における「超越」の次元の定位を課題とし、特に「関係性」を中心軸に据えて

検討を行った。日本教育学会では、ユング「個性化」論が、決して他者性への視点を欠くものではないことを、彼の転移論（『転移の心理学』）を取り上げ、それを「関係性」の視点から読み直すことで証明した。さらに、「異他なるもの」との「関係」という観点から、修士論文「個性化とプラグマティズム—ジェイムズ思想によるユング心理学再考」を執筆した。井藤は、教育における「超越」の問題に対し、シュタイナーの教育思想を考察対象に据え、とりわけ、シュタイナー人間形成論における「自己変容」の問題について検討を試みた。本年度発表した3つの論文（『京都大学大学院教育学研究科紀要』、『ホリスティック教育研究』に発表）では、シュタイナーのゲーテ論分析を通じて、シュタイナー自身の思想構図を浮き彫りにさせ、「自由」獲得の前提としての「自己変容」の内実を明らかにした。柄澤は、人間形成における「超越性」の問題について、メルロ=ポンティの「身体」における「意味」の生成の構造を手がかりとして検討を試みた。特に日本教育学会で、身体、感覚というところに焦点をあてつつも「超越性」に深く関わる「意味」生成の次元の深みそのものについて、メルロ=ポンティの「作動的志向性」の捉え直しから考察を行った。

また、本年度の研究活動において特記すべき事柄として、以下の7項目が挙げられる。

- ①ホリスティック教育研究会において、一つの部会を設け、研究分担者4名による共同発表（司会：西平直教授）を行った。夏期集中講義では②坂井による「唯識」についてのゼミナール、③小室弘毅氏（関西大学）によるボディーワークを取り入れた講義を開催した。また、冬期（2月）には④大阪府立大学の吉田敦彦教授を招いての京大・府立大合同ゼミ、⑤川口陽徳（東京大学大学院）による「わざ」の伝承についての研究発表、⑥小室弘毅氏による講義（夏学期からの継続テーマ）の企画実行を予定している（2010年1月現在）。さらに⑦本年度研究活動の集大成として、グローバル COE 研究開発コロキウム「論文集」（北斗プリント）を2月に発行予定である。

【研究成果】

研究メンバーの個々の思想研究における考察の深まり、学会での研究成果の発表、および他大学との交流・合同ゼミにおける活発な議論を通して、本研究の課題である人間形成における「超越性」の問題について、多角的・包括的に究明することができた。本研究において検討した超越を媒体とする基本理念—「自己変容」・「ケア」・「関係性」の問題は、個々の思想研究の成果によって、次のような4つの共通理解に集約することができる。すなわち、①自己変容は、個人レベルでの「自由」の獲得につながる前提であること。②自己変容は、世界への「身体性」の開示として発展し、「意味の生成」を可能とすること。③自己変容は、「他者」との関係性を形成し、そこに「相互性」や「非対称性」という新たな問題を生じること。④それぞれの自己変容の展開は、ケアという実践形式のもとで構築される人間形成の必須要件であり、同時にケアする主体の自覚的様態であること。これらの共通理解を本研究の成果としたい。